

論文審査の要旨及び担当者

No.1

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	小沢 浩美
論文審査担当者		職 位 ・学 位	氏 名	印
	主 査	慶應義塾大学健康マネジメント研究科 教授 (博士・医学)	田口 敦子	
	副 査	慶應義塾大学健康マネジメント研究科 准教授 (博士・看護学)	添田英津子	
	副 査	慶應義塾大学健康マネジメント研究科 教授 (博士・医学) (博士・政策・メディア)	秋山 美紀	
	副 査	慶應義塾大学健康マネジメント研究科 教授 (博士・保健学)	永田 智子	
(論文審査の要旨)				
【背景】 増加する医療的ケア児への支援が求められている社会的背景を踏まえ、社会的な支援のひとつである保育に焦点を当てた論文であった。文献検討によって、医療的ケア児の家族の介護負担は高く、医療的ケア児への支援は喫緊の課題であると考えられた。また、本邦では保育の需要が高まっている状況にあり、医療的ケア児においても保育のニーズがあることが把握できたが、安全上の問題や看護師の確保といった課題によって医療的ケア児が十分な保育を受けられていない状況が把握された。さらに、保育所において医療的ケア児の保育に携わる保育者が抱く困難感や、看護師の立場の不明瞭さ、看護師の役割へのとまどいが報告されていた。以上の背景より、本研究は、保育所における医療的ケア児への支援とはどのようなものかを明らかにすることを目的とした。 【研究の構成と概要】 本研究は 3 つの研究から成る。研究 1 では、医療的ケア児の保育に携わる保育者が抱く困難感とはどのようなものなのかを明らかにすることを目的とした。保育所に勤務する保育者へインタビューを実施し、収集したデータを、グラウンデッド・セオリー・アプローチのオープン・コーディングを用いて質的帰納的に分析した。その結果、保育者が抱く困難感に関する 4 つの概念を把握した。保育者は、子どもの医療器具にとまどい、子どもへの触れ方や声のかけ方が分からず《子どもに接することへのとまどい》を感じていた。また、医療器具の扱い方によっては子どもの命に影響を及ぼすと感じ、医療器具の扱い方や扱ってよい範囲が分からず《子どもの医療器具を扱う怖さ》を感じていた。さらに、保育者は、子どもの医療的ケアに伴う安全の確保と発達の援助を考えることの間で《保育活動に制限があるもどかしさ》を感じ、医療的ケアを実施する看護師から保育への理解や配慮を感じられるか、子どものためになっているかによって《子どものためになる看護師との連携》に困難を感じていた。保育者の困難感を軽減し、医療的ケア				

児への保育環境を整えるためには、保育者が感じる困難感の具体的内容や程度を踏まえたうえでの医療的な知識の提供と、医療的ケア児との関わり方のサポートが必要であること、学際的視点を重視し、保育者と看護師が互いの専門的視点を共有できる教育プログラムを検討する必要があることが示唆された。

研究2では、保育者が医療的ケア児に関わる際のとまどいはどのように変化し、医療的ケア児に対し保育者としてどのように関わるようになるのかを明らかにすることを目的とした。医療的ケア児が利用する保育所2施設に勤務する保育者7人に半構造化インタビューを実施し、グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。その結果、保育者は《医療的ケア児と関わることへのとまどい》を感じていたが、《医療的ケア児との関わり方の模索》によって《医療的ケア児をひとりの子どもとして認識する》ようになり、《子どもの医療的ケア対応を学ぶ》ことを通して【医療的ケア児の保育をつくる】ことをしていた。看護師と協力して【医療的ケア児の保育をつくる】ことができれば保育者は《保育の充実感》を得ていたことが明らかとなった。保育者が専門性を発揮し、医療的ケア児の保育に貢献するには、看護師による支援が求められる可能性が示唆された。

研究3では、医療的ケア児の保育中に看護師が行っている支援とは何かを明らかにすることにより、看護師の専門性に関する示唆を得ることを目的とした。医療的ケア児が利用する保育所に勤務する看護師9名へ半構造化インタビューを実施し、収集したデータを、グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。その結果、看護師は《保育の状況確認》によって《保育者が抱く困難感の推測》や《医療的ケア児の状態に悪影響が及ぶリスクの査定》を行い、《保育者と医療的ケア児の関わりを支える》《医療的ケア児の状態を整える》《保育の環境を整える》ことを通じて【医療的ケア児の育ちを支える】支援につなげていたことが明らかとなった。看護師によるいずれの支援も保育の内容や保育者の状況を考慮した支援であり、医療的ケア児の保育における看護師の専門性が示唆された。

本研究の総括では、医療・保健・福祉領域における専門職間連携について考察されていた。今後の医療的ケア児への保育においては、保育に関する政策や人員配置を整えることに加え、保育に関わる専門職が連携し、医療的ケア児が保育に参加できる方法を考えて協力する姿勢を持つことが重要であることが述べられていた。

【評価できる点】

本論文は、医療的ケア児への支援といった、重要な社会的課題に真摯に取り組んだものであり、まだ研究の少ない、医療的ケア児への保育のあり方について、専門職間の連携や安全上の問題といった観点から今後の課題を提示している。審査では、その意義の深さに対して高い評価が寄せられた。加えて、対象とする課題に対して丁寧かつ綿密な

インタビュー調査と分析が行われており、その学術的姿勢の誠実さと探究心の高さが随所に窺われた。また、先行研究や関連文献に対する丹念な検討を通じて、研究の背景を的確に把握し、その上で3つの研究を積み重ねて展開している点も評価されるべきものである。研究1は小児保健研究（2023年）に、研究3は日本看護科学学会誌（2024年）に掲載済み、研究2は現在査読中であり、着実に公表を進めることができている。

【審査時の質問と指摘事項】

質問と指摘事項は主に3点あった。1点目は、研究の意義にかかわる点であった。研究2で実施されたインタビュー調査の対象となった施設の特徴や、そこから得られた結果の解釈について質問があった。小沢君からは、対象施設は、医療的ケア児のみを受け入れている施設で一般的な保育所ではない。しかし、保育者が障害を持つ子供たちと初めて関わる際に戸惑いを感じることはあるため、今回の結果のように保育者への支援や、児一人ひとりに合わせた丁寧なケアを記述できたことは意義がある旨返答があった。

2点目は、研究方法についてであった。対象施設の選定条件や、グラウンデッド・セオリー・アプローチを選択した妥当性について質問があった。対象施設についてはベストプラクティスとは言い難いが、まだ好事例が少ない中、現状を示すことが必要と考えた。その中、グラウンデッド・セオリー・アプローチは理論生成ができるという利点があるため選択したとのことであった。

3点目は、本研究の政策的示唆についてであった。医療的ケア児に関わる法律が整備されてきたことで、今後は一般的な認可保育園でも障害を持つ子供たちへの対応が求められることから、本研究がどのように貢献できるかについて質問があった。小沢君からは、本研究では、保育者が持つべき医療的ケア児等の専門知識や、看護師との連携が不足している点を課題として明らかにできた。そのため、保育者の教育課程において医療的ケアに関する知識や実習を取り入れ強化することや、連携の促進に向けて、保育者と看護師がお互いの専門性を理解し協力し合えるよう、話し合いや情報共有の場を設けることの必要性を提示できることが貢献できる点として説明された。

【審査結果】

上記の指摘事項はあったものの、本学位論文は、医療的ケア児の中でも、まだ研究の少ない保育所に焦点を当て、保育所における医療的ケア児の支援とはどのようなものかをグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて明らかにしたことは、先駆的かつ開拓的な意義を有しており、この領域に大きな貢献をもたらすことが期待できる。そのため、審査担当者は全員一致して、本学位論文をもって小沢浩美君に博士（看護学）の学位を授与することが適当であると判断した。